玉川教会たより

NO,454

2月17日

ミッドナイトボイス

▼ジョン・ソール、この名前をこの欄に上げるのは、ちょっと恥ずかしい。間違っても、聖書やキリスト教に通じた作家という紹介は出来ない。ホラー小説作家だ。アメリカでも最も人気のあるホラー作家の一人で、常にスティーヴン・キングやロバート・R・マキャモン、D.R.クーンツなどと並んで紹介される超大物だ。しかし、他の三人のような文学的拡がりも、思想的背景もないだろう。

しかし、大好きな作家で、正直他の3人以上に愛着むしろ執着を覚える。日本語になった文庫本は約20冊。その全部が面白い。田舎っぽいとか、少女虐待に執着しているとかという批判も聞くが、それは全部を読んでいない者の偏見だ。

▼『殉教者聖ペテロの会』（創元推理文庫）のように、修道会、教会を舞台とした作品もあり、『マンハッタン狩猟クラブ』（文芸春秋社文庫）のように、都会それも地下鉄を舞台とし、単なるホラーではない作品もある。

今回取り上げるのは、『ミッドナイト・ボイス』。

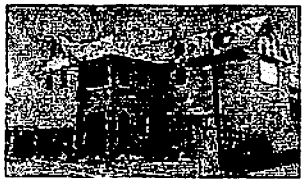
通り魔に夫を殺されてから、必死で12歳の娘ローリーと11歳の愛子ライアンを育ててきたキャロラインは、経済的にも限界にいる。その時、偶然出会った知的でハンサムで金持ちの紳士トニーと恋に落ち、結婚することになった。一家はトニーの住む高級アパートメント、ロックウェル館に移り住む。〝セントラルパーク・ウエストの大妖館〟として知られる不気味な建物だった。ライアンは毎晩悪夢にうなされ、ローリーはみるみるやつれていく。親切だがどこか風変わりな住人たちの正体は。

▼これだけで、ストーリー的には結末まで読めるかも知れない。ロックウェル館は、そこに入り込んだ子供たちの若さを奪い、自らは新築の姿に若返る妖館であり、住民は、いわば若さを吸い取る吸血鬼だ。こんなふうに紹介すると、いかにもB級ホラーだ。それに違いない。しかし、ありふれた低俗とも見えるお膳立てでも、ジョン・ソールの手にかかれば…。この後は、読んで貰うしかない。

▼読みようだが。ジョン・ソールの作品には、思想、信仰、文明批判を織り込んだスティーヴン・キング、ロバート・R・マキャモン、D.R.クーンツより以上に、読者のそれを刺激し、自由な、誤解を許すまでの解釈の幅があるように思う。

▼妖館・ロックウェル館と教会とが重なる。子供たちが出入りしなくなった妖館が老朽化するように、教会もそこに信仰生活する者も、老朽化して行く。若さを輸血しなくては…。教会の高齢化を懸念する声、危機感は、つまりはそういうことなのか。

▼否、教会は血を貰う必要はない。命も貰う必要もない。むしろ逆ではないだろうか。実際には、様々な挫折を体験した若者たちが、教会、聖書、教会員に出会い、触れ合うことで、喪失していた若さや生気を、取り戻しているのだ。教会は、2000年間、人々にパンと葡萄酒を、つまり御言葉と命を、提供して来た。これが事実ではないのか。この御言葉と命とは、決して尽きることはない



▼教会の高齢化云々は、議論の前提を間違えているのではないか。教会は、若い人たちに、生気や血を分けて貰う必要はない。必要なのは、若い人たちの方だ。もし、教会が命の御言葉を提供できなくなってしまったならば、深刻なのは、遠からず御国に移される高齢者にとってではない、深刻なのは、教会からパンと葡萄酒を、つまり御言葉と命を、いただくことが出来なくなる若い人たちにとってなのだ。

だから、教会自体が、建物も組織もそして気持ちも絶えず新しく作り替えられなければならない。時代の妖館になってはならない。

そのためには、担い手たる若い人の存在が求められる。そういう順番だ。この順番を逆にしてはならない。

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　Tel. 042－732－9321